

ミュシャ作《ジスモンダ》考察 肖像画としての演劇ポスター

早稲田大学大学院文学研究科美術史学コース

修士課程2年 河合莉沙

アルフォンス・ミュシャ（Alphonse Mucha, 1860-1939）が19世紀末にパリで制作した一連のポスターは、当時から人気を博し、高く評価されてきた。なかでも、最初に制作した《ジスモンダ》は、女優サラ・ベルナール（Sarah Bernhardt, 1844-1923）が主役を務めた戯曲『ジスモンダ *Gismonda*』の再演を宣伝するものであり、本作をきっかけとしてミュシャの名は広まった。ベルナールは本作を気に入り、ミュシャと6年間の専属契約を結ぶと、彼女が主演する演劇のポスターを全て彼に依頼した。本発表では、ミュシャによるベルナール主演の演劇ポスターのうち、第一作目である《ジスモンダ》に焦点を当て、本作が単なるポスターというよりも、肖像画としても特別な意味を担っていた可能性について検討する。

19世紀末のパリでは、ポスターが流行の最盛期を迎えていた。とりわけジュール・シェレはポスターに鮮やかな色彩を使用したはじめての画家であり、ポスター表現の多様化に大きく貢献した。以来、ポスターは単なる広告の媒体としてだけではなく、誰もが鑑賞できる芸術作品として親しまれるようになった。このような流行を受け、ベルナールも自らが主演する演劇を宣伝するためにポスターを依頼した。

1894年、挿絵画家としての評価が高まっていたミュシャが《ジスモンダ》のデザインを担当することになった。画面中央に配置されたほぼ等身大のベルナール像には、彼女の華やかさや存在感の大きさが示されている。また、舞台装置のモチーフを組み合わせた背景には、演劇の世界観が表現されるとともに、ベルナールに視線を集める工夫がみられる。本作の図像は後の公演のポスターにも使用され、彼女自身を示すイメージとなった。

しかし、ミュシャは本作でただ美しいベルナールの姿を描いているのではない。公妃ジスモンダとして威厳のある姿でベルナールを捉えることにより、彼女が確立した世界的大女優という揺ぎない地位を明らかにしたと言えるのではないか。